

現代社会と平和

今日の平和学は、いわゆる「構造的暴力」を再生産するさまざまな権力関係を視野に収めながら、このような暴力を生み出さざるをえない知と社会の枠組そのものを問題化することで、学際的な新しい知の試みとして展開している。本研究プロジェクトは、そのような近年の平和学の方法と成果に学び、グローバル化と多文化化が急速に進みつつある現代社会における「平和」の課題を、正義論、世界システム論、ジェンダー論、ポストコロニアルな文化研究などの視点から多角的に明らかにすることに努めた。

まずは現代社会と平和をめぐる諸問題を理解するために、平和学、現代政治論、正義論、文化論、フェミニズムと平和をめぐる議論など、さまざまな角度から9人の講師をお招きして講演会を行った。2005年度には中馬祥子氏「エコロジカル・フェミニズムの再検討」(6月1日)、高橋雄一郎氏「パフォーマンス研究から平和を考える」(7月13日)、阿木幸男氏「非暴力トレーニングの思想」(11月16日)、水島朝穂氏「沖縄米軍基地をめぐる法と政治の現在」(1月13日)、2006年度には五味俊樹氏「21世紀アメリカの世界・軍事戦略」(7月7日)、伊藤武彦氏「平和創出の途 トランセンド・メソッド」(9月29日)、宇佐美誠氏「グローバルな正義：貧困と戦争」(11月1日)、中山竜一氏「ロールズの法哲学と平和 「万民の法」を手がかりに」(11月24日)、杉森長子氏「日米における女性と平和」(12月15日)である。それらを通して現代社会と平和をめぐる課題を確認し、各自の問題意識を深化させるのに有効な視座を得ることができた。

また平和構築の現場を見聞するため、2006年2月、2007年2月の2度にわたって沖縄への研修旅行を行った。2006年は沖縄本島を訪れ、沖縄戦をめぐる史跡や平和祈念館・美術館などのほか、米軍基地問題に揺れる辺野古、沖縄国際大、名護学院などを訪問、平良夏芽氏、高作正博氏、知花昌一氏、宮城晴美氏などからお話を伺うことができた。2007年は沖縄本島及び石垣島・西表島を訪れ、琉球大の平和教育の実情に関してインタビューしたほか、西表島で友和村(フリースクール)を開くとともに無防備平和条例の運動をされている石原昌武氏にお話を伺った。以上を通して、平和構築の現場における具体的な取り組みについて見識を深め、平和をめぐる理論と実践の結節点を強く意識することができた。

これらの研究活動を踏まえて、メンバーは成果をまとめ、本年報に次のとおり発表する。斎藤修三は、ガルトゥングが提唱するトランセンド法(超越法)に着目した。周囲の関係者をも当事者として位置づけつつ、共感的な対話を通じてパートナーシップを形成するクリエイティブなその和解法を、ネオリベラルなグローバル世界で周縁化された人々を

取り巻く分断支配の危機を乗り越える方法として応用することの可能性を論じる。メキシコ、沖縄、バングラデシュが直面する非平和の諸相に即して、NGO や市民活動の現場における積極的平和創出のための連帯の方法を模索した。河見誠は、平和憲法問題や国際正義論の蓄積に依拠しつつ、対話不可能にみえる戦争賛成論・反対論の袋小路に、「絶対平和論」の批判的再検討を通じて、建設的な対話が生み出される可能性を模索しようと試みる。戦争賛否論の各立場を分析し、絶対平和論への多くの人々の躊躇を手がかりに、対話の糸口を探る。輪島達郎は、海老名弾正の平和論を分析しつつ、近代キリスト教国家論の課題と限界を論じた。海老名は、日清・日露・第一次世界大戦のいずれにおいても義戦論を展開したナショナリストである一方、国粹主義と軍国主義を批判して博愛主義を訴え、日本の伝統的な祖先崇拜をしりぞけ、個人の価値と民主主義を擁護した側面を持っている。平和の実現を地上における「神の国」の実現として理解しつつ、その手段としての国家と戦争を神学的に正当化していった海老名の論理に、現代の「正戦」論の神学的な原型を析出した。鈴木直子は、平和論とジェンダー論の結節点に着目しつつ、平塚らいてうの平和論を分析する。戦場での性暴力と平時のDV や基地売春などの連続性を指摘し、批判的に捉えようとする近年の平和と女性に関する議論は、従来対立しがちだった平和運動と反家父長制運動（フェミニズム）の観点とを統合させる可能性を持つ。平塚とその周辺の反戦平和思想の諸相にふれつつ、日本における「女性」と「平和」の関係およびその可能性を探った。

（斎藤修三）

米墨国境地帯、辺野古、バングラ —— 弱者連帯へ向けた市民運動の広がりトランセンド法
斎藤 修三 （英文学科教授）

戦争賛否論における対話可能性

河見 誠 （家政学科教授）

海老名弾正の平和論

輪島 達郎 （教養学科准教授）

平塚らいてうの反戦平和 —— 女性は平和主義者か？

鈴木 直子 （国文学科准教授）